

砂漠の狂信者

英雄たちのバラード

落合信彦



真の狂信者

英雄たちのバラード

落合信彦



砂漠の狂信者

——英雄たちのバラード

一九八二年三月二五日 第一刷発行
一九八二年四月二五日 第二刷発行

定 価 九八〇円

著 者 落合信彦

発行者 堀内末男

発行所 株式会社集英社

一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一〇

電話 出版部(〇三)二三八一二八四二

販売部(〇三)二三八一二七八一

印刷所

中央精版印刷株式会社

株式会社美松堂印刷所



© N. OCHIAI, Printed in Japan, 1982
0093-772367-3041

検印廃止。落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

目次

第一章 砂漠の狂信者

アラブ世界、いや世界の覇王を狙う男

5

第二章 ザ・パワー・ゲーム

宿命のイスラエルとエジプトが手を結ぶ日

73

第三章 KGBの吊鐘

機甲師団を後退させてまで賭けたものは

121

第四章 ボビーよ

国民を絶望の淵に落したニュー・リーダーの死

191

あとがき

243

ブックデザイン 江島 任
カバーイラスト 滝野晴夫
イラスト資料 WWP

砂漠の狂信者

——
英雄たちのバラード

故ロバート・フランシス・ケネディに捧げる

ボビーよ、おれは決して忘れない、
あんたのあの熱い心を！

第一章 砂漠の狂信者

「しかし、少佐、カダフィはもはやあなたの愛したカダフィではない。あなたの友情に値しない男になり下ってしまったのです」

「かつては英雄だった……」

ジャリブがポツリと言った。

その日の朝、モハメッド・ジャリブはいつもより早々と朝食をすませ、必ずかかってくるであろう呼び出しにそなえて外出の支度をしていた。

八時を少ししまわった時、電話が鳴った。彼は受話器をとり上げた。誰だか確かめる必要もなかった。

「おはよう、デビッド、そろそろかかってくる頃と思っていたよ」
相手はちょっと間を置いた。

「では少佐、すぐお会いしていただけますね」

CIA作戦局海外諜報部副部長、デビッド・パイルの声はいつになく緊張していた。

「そのつもりで用意はしていた。ところで、デビッド、テレビ・ニュース以上のものを何かそっちでつかんでいるのかね」

「今のところわれわれの知る限りではパレードを観閲中襲われ、多数のケガ人が出たが、サダトやムバラクの生死についての情報は全くありません。襲撃者は四人でその場で捕まったが四人ともエジプト軍に所属する軍人とのことです。これ以上のことはカイロ支局もつかんでいません。通信社も同じです。現場には完全報道管制が敷かれていると思われます」

ジャリブは時計を見た。八時十分。

「よしわかった。今から二十分後にそっちへ行く」

彼は受話器を元へ戻すとコートをひっかけた。

アパートの外に出るとジャリブは思わず身をふるわせた。十月の初めとは言え、底冷えのするような寒さだ。地中海の太陽がふりそそぐトリポリで生れ育った彼にとつて、毎年のことながらワシントンの寒さはこたえた。しかし、それも背に腹はかえられないことだった。ここワシントンにいるからこそCIAやFBIの保護を受け、一応の身の安全は守られているのだし、亡命者ながらも人並みな生活が保証されているのだ。

ジャリブとバイルが会う場所は、いつもセイフ・ハウス・ナンバー・スリーと決まっていた。CIAがワシントン市内に持つセイフ・ハウスは十軒以上ありそれぞれにナンバーがついている。

ナンバー・スリーはペンシルバニア街の西の終りにある古めかしいアパートだった。しかし、古いのは表向きだけで中は北歐式家具で統一され、超モダンな雰囲気をも出し出している。建物全体に完全防音装置がとりつけられ、CIAメンバーやエージェントがリラックスして会うことのできる文字通りセイフな場所である。もちろんこのナンバー・スリーも他のセイフ・ハウス同様、CIA所有とは登録されていない。CIA下にあるダミー企業が、さらにダミーを使って買い取るからだ。



ナンバー・スリーはジャリブのアパートから歩いてほんの五分ぐらいのところであった。しかし、そこに着くまで彼はいつも十五分以上の時間をかけた。パイルからきつく忠告されていたせいもあるが、それは同時に亡命生活中の彼自身の身を守るための必要性からでもあった。このような注意を払わなかったために、すでに十人以上が本国から向けられた処刑部隊によって血祭りに上げられているのだ。

ジャリブはコートのエリを立て、セイフ・ハウス・ナンバー・スリーとは反対の方向へ歩き始めた。“襲撃者は四人、四人ともエジプト軍の軍人”と彼は独りごとのように繰り返した。そして、今自分が恐れていることが絶対に現実であって欲しくはないと願っていた。

元リビア陸軍少佐、モハメッド・ジャリブにとってワシントンでの八度目の長く寒い冬が訪れようとしていた。

セイフ・ハウスに着いた時、デビッド・パイルは地下の会議室で彼を待っていた。パイルの横には中東部門リビア課のスタン・バンディがすわっていた。CIAのキャリア・オフィサーの中でも、アラビア語を自在にこなす数少ない男の一人だ。バンディを見てジャリブは直観的にいやな予感におそわれた。恐れていたことが大きく心の中でクローズ・アップされた。

ジャリブは、テーブルをはさんで二人に相對して腰をおろした。

「して、その後の状況は」

「カイロ支局からは何の新しい情報も入ってきてません。SISやモサドにも当たってるんですが、彼らもわれわれ以上のものはつかんでいないらしい。肝心なサダトの生死に関する情報はゼロです」

「四人の犯人については確かめたのかね」

「それは支局も確認済みです」

「確か二カ月前から君達は、サダトが一部の狂信的軍人たちに命をねらわれているという情報をつかんでいたのだろう」

「そうです、確実な情報でした。エジプト側にはちゃんと流しました。それで二週間前のあの大量逮捕となったわけです」

「しかし、完璧ではなかったというわけか」

「われわれにはあの情報を彼らに渡すことが精いっぱい、それ以上のことはできませんでした。なにしろデリケートな関係にありますからね」

パイルが弁解じみた口調で言った。

「しかし、少佐」

とそれまで黙っていたバンディが口を開いた。

「実に興味深いものがあるんですよ」

そういいながらバンディは、一台のテーブルコーダーをテーブルの上に置いた。

「先ほどわれわれがモニターしたリビア国営放送のテープです」

カチッという音がして、テープが回り始めた。

少々鼻にかかったかん高い声のアラビア語が会議室に響いた。

「エジプト人民よ！ サダトの醜い顔はこの地上から消え去った！ 敗北と妥協と恥に満ちたあの顔はもはやない。彼は死んだのだ。たった今、神が彼に天誅を下したのだ！……」

ジャリブは、全身の血が頭にのぼって行くのを感じた。

ムアマル・エル・カダフィ！ 間違いなく彼の声だ。

「エジプト人民よ！ 革命のために立ち上れ！ そして世界に対して叫ぶのだ。アラブ・エジプトは再びあなたの方の手にあると」

その演説は五分ほど続いた。

聞き終った時、ジャリブのにぎりしめていた両手はじつとりと汗で濡れていた。

「どう思いますか、少佐」

パイルが聞いた。

「カダフィの声に間違いない」

ジャリブの声にはどこか防御的な響きがあった。

「それはわれわれも確信しています。奴の声紋とも一致してますしね。しかし、わたしが聞いているのはこの内容についてです」

「……………」

パイルが聞かんとしていることの意味はジャリブには十分にわかっていた。しかし、彼の心の中の何かがブレーキをかけていた。

パイルがじれったいという調子で続けた。

「いいですか、少佐。われわれも含めて西側諜報機関は、サダトの状態については何ひとつとしてつかんでいないのですよ。しかし、あなたも今聞いたようにカダフィはすでにサダトが死んだと明言している。これをどう考えますか」

「しかもこの演説は今から四十五分前に行われたものです」

とバンディが口をはさんだ。

「ということは、正確には事件が起きてから五十五分しかたっていないのです」

ジャリブはそれでも黙ったままだった。

「少佐、あなたはカダフィという男の性格を一番よく知っている。われわれは奴の演説を一応分析してみました。しかし、それが正しいか否かはカダフィを知るあなたの言葉いかにかかっているのです」

「その分析の結果を聞かしてもらおうか」

やっとジャリブが口を開いた。パイルがバンディを見てうなずいた。

バンディがごく事務的な口調で話し始めた。

「この演説の中で最も強調されて繰り返し語られているのは、サダトが死んだこととエジプト国民への革命への呼びかけです。特にサダトが死んだことに関しては、一点の疑いもないほど強調されています。それらの部分をPSEにかけてもみましたが、ストレスは全くないのです」

さすがCIAだとジャリブは、内心感心した。どんなトリックも見落さぬほど徹底している。PSEとはサイコロジカル・ストレス・エヴァリュエーターの略で、別名真実発見器とも呼ばれる。ウソ発見器と違って体のどこにも接続する必要はなくその人間の声だけあれば十分で、耳では聞きわけられないようなごく微妙な響きや強弱度をキャッチし、それによってその言葉の信憑性を測る器械だ。ジャリブも亡命して来た時、この器械にかけられたことがあったが、その信頼度は九十五パーセント以上と考えられている。

バンディが続けた。

「PSEになにも出なかったということは、とりもなおさずカダフィがサダトの死に関して絶対的な確信を抱いているということです。問題はこの部分なのです。なぜそれほど確信できるのか……」

答えは二つしかありません。まず第一に、彼は本当にサダトが死んだことを知っている。